

ローマ大学、ナポリ東洋大学日本語教育調査

国際日本研究センター 対照日本語部門教員 高垣敏博

2014年11月19日から26日にかけてイタリアのサピエンツァ・ローマ大学およびナポリ東洋大学における日本語教育調査に出かけた。21日はローマ大学、その後ナポリに移動して24日にナポリ東洋大学を訪れる計画であった。



[1] サピエンツァ・ローマ大学(Università degli Studi di Roma "La Sapienza")訪問

2014年11月21日3時に東洋研究学科の日本語日文学科長(Direttore Dipartimento Istituto Italiano di Studi Orientali)のマティルデ・マストラランジェロ(Matilde Mastrangelo)先生に面談をお願いしていた。

ローマ中央駅(Termini)から南へ2通りほどのプリンチペ・アマデオ通り(Via Principe Amadeo)にある東洋研究学科(Dipartimento Istituto Italiano di Studi Orientali)はイタリアらしい石造りの真四角な建物の中に空間をとる2階建ての小さな一つの教育機関となっている。周りは、中国やインド系の移民が多く住む異空間で、東洋のことを学ぶには相応しい印象を与える。



ここに毎年 460 人の学生が入学し、3 年間、7 つの言語から専攻語を選択する。学士課程を終えると、さらに 2 年間この中から 100 名ほどがマジストラレ(magistrale)と呼ばれる、より専門的な課程へと進む(学部を終えているので大学院修士課程のようであるが、大学院にしては進学者数が多い)。学科全体の 460 人のうち、日本語を選ぶ者は 180 人程度、中国語 180 人、アラビア語 80 人、韓国語 50 人、その他ヒンディー語、ペルシャ語、ベンガル語と続く。



マストランジェロ先生には、2010 年 3 月に東京外国語大学で国際日本研究センター主催の国際会議「世界の日本語・日本学～教育・研究の現状と課題～」が開催されたときにお目にかかったが、大勢の出席者であったために、直接お話できたのは今回が初めてである。学科長室で学科のようすを詳しく教えていただいた後、日本人講師斉藤先生の漢字の授業を見学させていただいた。多くの授業が 20～30 人のクラスが行われるのであるが、この授業はなんと、講堂を教室にしての 300 人登録、実質 200 近くが出席している。教室に入るとその数に圧倒される。



先生はわかりやすく「肉」、「屋」、「食べる」、「買う」などの漢字とそれを用いての文型練習など歯切れよく説明され、学生たちも熱心に聴き、素直に反復している姿に感動。サピエンツァ・ローマ大学はローマに 3 つある大学の 1 つで、伝統も長く学生数も多く、最

大規模の大学である。かつて 21 もの学部があり、東洋研究も学部(facoltà)であったようだ。それが 5 年前に大学政策の変化のせいであろう、11 学部が減り、多くの学科(dipartimento)に再編されたようだ。東洋研究学科は他の 3 つの学科とともに哲文学部を構成するようになった。

日本語教育の詳細をメモしておこう。

- 1) 「日本語学習の目標」は、1 年生は文法、読解など書きことばのみ、2 年から会話や LL などを導入、3 年でオールラウンドな力がつくような組み立て、となっている。
- 2) 「必修科目」は文法解説、翻訳(週 2 時間: イタリア人講師)、文法演習(週 5 時間 (3 年生は 4 時間: 日本人教師)
マジストラーレの場合は文法解説、翻訳が 4 時間、文法演習が 6 時間。
- 3) 「教員の構成」は文法解説、翻訳はイタリア人講師が担当、文法演習は日本人教師が担当する。教員は言語・文学 3 名、歴史 1 名、美術 1 名の専任。その他、3 名の日本人非常勤講師である。

4) 「授業」は、

- 1 年次—300 人単位での授業(大講義室) 授業に出るのは義務ではなく、全員が授業に参加しているわけではない。文法解説、翻訳の授業ではイタリア語で文法の説明をして、日本語で例文を出し翻訳する。学生に読ませたりもするが、大抵前の列に座っている学生を指すため、後ろに座っている学生が講義中に声を出して読む機会はほとんどない。
- 2 年次—LL 教室を使用した授業 (週に 1-2 時間)
設備の関係から約 25 人のグループに分けて行う。LL 教室での授業は少人数のため、学生の発言機会が多く、活動の幅も広い。
- 3 年次およびマジストラーレ—文型の習得の確認に加え、日本研究、論文の作成のために日本語で書かれた資料を読む必要になった学生の読解力を高めるための翻訳の授業が中心となる。

学生は入学時 180 人ほどであるが、2 年生で 80~90 人登録で実質 60 人出席、3 年生になると 30 人ほどになるという。もちろんこの減少は日本語学習の厳しさを示しているようであるが、これには留学で日本に滞在している者がいることも影響しているようだ。

[2] ナポリ東洋大学 (L'Università degli Studi di Napoli L'Orientale) 訪問

11 月 22 日にローマから高速列車を利用して約 1 時間でナポリに到着。雰囲気はガラッと変わり、海辺の町ナポリは庶民的という言葉が当てはまる。24 日に面談をお願いしてあったシルバナ・デ・マイオ(Silvana De Maio)先生に紹介してもらった海に面し、遠くベスビオス山を望む気持ちのよいリゾートホテルにチェックインした。先生は早速ご挨拶に来てくださり、ご主人とともにナポリの名物料理までごちそうしていただいた。



11月24日10時に大学へ到着。ナポリの中心街になるが、この辺りは下町の観光的にもよく知られたスパッカ・ナポリ(Spacca Napoli)と呼ばれる界隈にありサン・ドメニコ・マジョーレ広場(Piazza di San Domenico Maggiore)に面している。伝統を感じる建物Palazzo Coriglianoが校舎である。



ナポリでも大学は学科ごとに校舎が離れており、ここにはアジア・アフリカ・地中海研究学科(Dipartimento Asia, Africa e Mediterraneo)だけが入っている。他の2つの学科は市内の別のところに位置しているらしい。学科と言ったが、かつての学部を廃して、学科を中心にするのが近年のイタリアの大学政策の流れだと改めて説明を聞く。いまこの大学は3つの学科からなっている。教員は、それぞれ何れかの学科に属しているが、学生のコースに合わせて、それぞれ柔軟に科目群を構成する。東京外大で教員が大学院組織に属し、2つの学部に出向いていくのと似たところがあるかもしれない。合理化の1つの方策のように聞こえる。ローマ大学でも21の学部を11学部へ縮小し、学科を整備したのと符合する。



四角く中庭をとった 6 階建ての古い建物だけの校舎であるが、学生が三々五々立ったまま歓談している。授業を終えた者、これから教室へ入る者たちが小さい中庭にあふれている。

待ち合わせていた正門のところでデ・マイオ先生と会う。会議室で、この大学の日本教育についての調査を開始。学科、学生、教員、大学院、などについて詳細な話を聞かせていただく。11 時半になると、日本語・日本文化関係の先生方が他に 5 名も集まってくださり、さらに授業や学生のことなど個別にお聞きすることができた。また、この大学が最初に日本と交流協定を結んだのは東京外大であるのだが、正午には東京外大からの 2 人の留学生が元気そうな顔を見せてくれた。それぞれナポリでの生活を楽しみながら、イタリア語を身につけようと努力していることがわかり微笑ましく思った。



お昼には教員のみなさんにナポリ発祥のピザ・マルゲリータをごちそうになる。



14時半にキアラ・ギディーニ(Chiara Ghidini)先生によるマジェストラレ1年生の授業を1時間参観することができた。学生は15人程度、学部3年生を終え、さらに専門課程のマジェストラレに進学しただけあって、全員が日本語で自己紹介してくれた。しばらくして通常の授業内容に移り、熱心に構文練習や質疑応答をしていた。最後にはみんなで日本の山口百恵の歌を歌った。



ローマ大の漢字の大教室授業にも驚いたが、ここでも1年生は400人入学。これを2クラスにわけて、200人ずつ1つの教室に入り、文法や作文など大勢による授業が行われていると聞いて、日本語人気とともに教育現場の実態もしだいに理解できるようになった。

学士課程は3年制で、2年生は250人、3年ではさらに減り150ほどになる。中には留学する者もいる。学科は「アジア・アフリカ、地中海研究学科」(Asia, Africa e Mediterraneo)、「人文社会学科」(Scienze Umane e Sociali)、「文学・言語学・比較研究学科」(Studi Letterari, Linguistici e Comparati)の3つがあり、その比率は30%、10%、60%とのこと。

日本語の授業は1年から3年まで週8時間。1年生では2時間ずつ導入文法(イタリア人教師)、文法練習(日本人教師)、作文、漢字・単語練習、2年では文法・会話(イタリア人教師)、文法練習(日本人教師)、聴解・読解、漢字・作文となる。3年では文法(イタリア人教師、日本語で)、作文・漢字(日本人教師)、「文化中級日本語I」(敬語に重点)、聴解(ニュースや映画)、などの内容である。

専門課程の「マジストラレ」に進学する学生はさらに2年間、アジア・アフリカないしは人文社会のコースを履修するが、週6時間の授業を受け、後者の場合はゼミ選択でビジネス日本語を学ぶ。

教員も学生もそれぞれの所属から科目群を選択する。学生は自分の学科独自の科目も学ぶようである。日本関連は、アジア・アフリカ・地中海研究学科の提供する日本語・文学の授業を全員が履修する。教員は8名の先生(うち2名がイタリア人専任、1名が日本人専任)、6名の母語話者の講師(うち1名が専任)が担当。その他、日本語関連以外のセッションから東洋史、国際関係、日本美術史、日本近現代史、東アジア外交史担当の5名が加わる。なお専任の3人の先生および2名の研究員(非常勤講師)の先生方が大学院博士課程を担当される。

日本語の到達レベルについては、日本へ留学した者については N2 (まれに N1 もいる)、留学しない者については N3 を取れるかどうかであるという。

学部卒業生のうちおよそ 100 人ほど、専門課程のマジストラレに進学する。日本関係では、アジア・アフリカは約 25 人、人文社会は 10 人程度という構成である。さらに博士課程まで進む者は少なく、日本関係では、1 年おきに 1 人程度ということである (去年はアジア・アフリカと人文社会から 1 人ずつが進学)。テーマとしては文学系 (推理小説、日本美術史) と社会系 (環境、日本現代史) など。なお、教員のうち多くが日本で学び、学位をとられた方である。授業参観させてもらったギディーニ先生は東京外大で日本語を覚えてから、宗教学を学んだとのことであった。いずれにしてもイタリア人の先生方に囲まれて、2 時間ほどずっと日本語で歓談していたときはイタリアにいることをすっかり忘れてしまいそうであった。

こうして、2 大学での調査を終えて、他にもヴェネチア大学のように日本語教育では一歩先を歩んでいる大学があると聞くにつけ、日本や日本語に対する確実な関心と熱意がイタリアにはあると感ずるのであった。

(高垣敏博)